

浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/> ナモの寺 検索
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁 10-11

第335号
平成23年9月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp



【語意】

林語のパーラミターの音写「波羅蜜多」あるいは「波羅蜜」。宗教理想を実現するための実践修行。完成・熟達の意であるが、現実界（生死輪廻）の此岸から理想界（涅槃）の彼岸に到達すると解釈して、到彼岸・度と漢訳する。

蕎麦の花：超空正道撮影

皆と
同じであることに
腐心をし

大過なきを
さしあたりの
目標とし

あまたの人々の中に
わが身を置くも

右に左に
彷徨うは
悲しき凡夫の性

今 重くのしかかる
ごだわりを捨て
利他 自分への思いを
他者に振り向けてみよう

遙か向こうの岸に
明るい世界が
見えてくる

波羅蜜多

「暑さ寒さも彼岸まで」とは、よくいったものであります。四季がはっきりしている日本ならばこそ、この諺が生まれたのでしよう。だからでしょうか、彼岸会というご先祖の供養をする行事は、日本独特のものだそうです。

ご承知のとおり、お彼岸は、春と秋にあります。昼夜が同じ長さの春分の日と秋分の日を中日とする前後三日を加えた一週間をお彼岸といいます。初めの日を「彼岸の入り」、終わりの日を「彼岸明け」、あるいは「果彼岸」、「満彼岸」ともいうようです。

春分の日・秋分の日は、『国民の祝日に関する法律』によりまずと、春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」、秋分の日「祖先をうやまい、なくなった人々

をしのぶ」とあります。ちなみに、戦前は、それぞれ「春季皇霊祭」「秋季皇霊祭」といつて、天皇自ら、宮中三殿の一つである皇霊殿で、歴代天皇はじめ皇后・皇族すべての皇祖の神霊を祀る皇室の大祭で、やはり、国の祭日でありました。

ただ、それは明治以降のことでありまして、平安中期頃より、京都御所清涼殿内の御黒戸の間で仏式で行われていたものが、明治政府の神仏分離政策によって、神式による祭典となったとのことです。そして、さらにそのルーツを尋ねると、809年（大同元年）、非業な死をとげた崇道天皇（早良親王）のために、諸国の国分寺の僧に命じて、春と秋の七日間、金剛般若経を読んで供養したという記述が『日本後紀』にみえ、これ

が、彼岸会の始まりだといわれています。

日本において仏教を語る上で、聖徳太子はとても偉大な存在です。その太子が創建されたという四天王寺は、平安時代以降、太子信仰の聖地となりました。そして、その四天王寺の西大門は、春分の日・秋分の日、ちょうど夕日が沈む位置に建てられていて、しかも、創建当時は、門前がすぐ海に面していたそうで、そこにすっぽりと日が没するさまは、年に二回しか味わうことのできない、それはそれは美しく、かつ荘厳な光景であったであろうと想像されます。

そのようなことから、西門は、西方極楽浄土の東門（入口）にあたるという信仰が生まれ、弘法大師（空海）は、この西門で、彼岸の中日に、遙か西方極楽浄土に思

いを馳せ、瞑想されたと伝えられています。

日が沈む西方は、死者の赴く先すなわち極楽浄土のある方角であり、彼岸の行事は、以上のようなことから、先祖を敬い供養する日として、今日まで脈々と受け継がれてきているといえましよう。

さて、「彼岸」ということばは、我々が住むこちら側の俗世界である「此岸」に対することばで、宗教的理想の境地、悟りの世界を表します。ですから、迷いの世界から、悟りの世界に渡ることを、「到彼岸」「度彼岸」あるいは単に「度」といったりします。

このことばは、梵語のパラミターの訳語として使われますが、ご存じ「般若心経」の正式名『摩訶般若波羅蜜多心経』の「波羅蜜多」であります。ここにおいては

「般若」は智慧、「波羅蜜多」は完成という意味で使われています。

彼岸へ渡ること、つまり仏の智慧を完成させる為には、六つの実践徳目が説かれます。それを六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧）といい、個々についての説明は他に譲りますが、仏教徒それぞれが目指すべき、菩薩行であります。しかし、釈尊は、次のように（『法句経』八五番）述べられています。

数多き人々のうち

彼岸に達するは

まこと かず少なし

余の人はただ

この岸の上に

右に左に

彷徨うなり

この法句には、二つの留意すべき点があります。一つは、わが身は、右に左に彷徨う数多き人々のうちのひとりではないかという自省の念を持つこと、もう一つは、かず少なき人と自負するものは、数多き人々の犠牲の上に、今の自分があることを知るべきであるということです。

スーパースターと呼ばれる人は、ほんの一握りです。そのスターも、他の数多き人々のことを忘れたとき、スターではなくなるのです。菩薩行は、利他の行がとりわけ大切で、むずかしいのです。

俳句の季題で、彼岸は春、秋の場合、秋彼岸というのだそうですが、お彼岸には、蕪村の句、「今日彼岸菩提の種を蒔く日かな」を、じっくりと味わってみたいものです。

◎浄瑠璃

古典落語の傑作『寝床』は、義太夫の趣味が高じた大店の旦那のために、長屋の店子一同が大弱りする話だが、あの義太夫こそが、実は「浄瑠璃」なのである。いや、義太夫だけとは限らない。河東節、常磐津節、宮園節、富本節、清元節、新内節など、西洋音楽が入ってくる以前の日本の音楽界（声楽）は、すべてこの浄瑠璃から派生したものだといっていほどなのだ。

事の起りは室町時代に求めることができる。悲劇の若者牛若丸と遊女浄瑠璃御前との悲恋が、平家琵琶の曲節である平曲、あるいは謡曲とは全く別の節で演じられ、これがたちまち大ヒット。江戸時代に入り三味線が伝わるとこれが伴奏楽器となり、文楽の人形操りともドッキングし、日本中を席卷するのだ。現代のニューミュージックやロック以上の、音楽

史上の大革命といつてよかつただろう。

さて、浄瑠璃姫にちなんでついた浄瑠璃だが、語源をさらに探っていくと古代インドに行きあたる。梵語では、ヴァイドゥールヤ。これがヴァイのほうとれて「琉（瑠）璃」になるのだが、この琉璃とは、実はキャッツアイ、猫目石のこと。『阿弥陀経』には、金、銀、瑠璃、頗梨（水晶）、車渠（シャ）貝、赤珠（さんご）、瑪瑙が、七つの高貴な宝とされ、特にその清浄さを強調して、浄瑠璃という名がつけられたという。

さらには『薬師経』には、西方に位置する阿弥陀如来に対して、東方に薬師瑠璃光如来が存在することが説かれている。そのために、東方世界は常に「瑠璃色」（紫色を帯びた紺色）に輝いており、建物は「七宝」で飾られているといわれる。宝石の瑠璃と仏教世界が結びつくのは、実はこの宝石の輝きが接点になるの

である。

ちなみに薬師如来は薬を常に持っている医王。この薬師如来の化身が、牛若丸が恋した浄瑠璃姫であり、仏教と日本の音楽は、ここでようやく結びつく。

この瑠璃という語は、色を形容することばに多く用いられ、翼と尾が瑠璃色の「瑠璃懸巢」、瑠璃色の釉薬をかけた「瑠璃瓦」などがある。

雑記

▼秋彼岸施餓鬼会

◎期日 9月23日（金）

◎時間 1時30分～2時30分

朱鮮やかに彼岸花の咲く頃、秋彼岸施餓鬼会を、右記のとおりに厳修致します。ご先祖様を偲び、どうぞ、皆さまお揃いで、お参り下さいます。

◆養虫や恋しくば鳴け吾も居り 沐魚

